OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	続　奥の細道ところどころ
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1957, 19, p. 30-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68512
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

続　奥の細道ところどころ

小島吉雄

石巻から平泉へ　(一)

石巻は、予想してゐたよりも繁華な街である。釜めし、蒲焼の看板の多い街でもある。また、病院と菓子屋との多い街でもある。

わたくしは、昨夜おそく石巻に着いた。そして、今朝、朝食前に日和山へ登った。日和山はもと葛西氏の城址である。そこに鹿島御児神社がある。立派な社である。隣りの丘には稲荷の社があったり、愛宕社があったり、湊町にふさはしい境域である。展望台に立つと、眼前に石巻湾が開けて見える。右手眼下にパルプ工場が見おろされ、更に遥かに松島の方が霞んで見える。宮戸島だ。正面左手寄りに、眼路近く田代島が横たはり、そのうしろに網地島が重なり、更に牡鹿半島が左方からここまで延びて来てゐる。金華山は、半島の向う側にあるわけだが、今は見えない。芭蕉は、五月十日、石巻に着くと、すぐ小雨の晴れ間を見て、この日和山に上った。しかし、奥の細道には、その事を省略してゐる。曽良の日記には、「奥ノ海遠島尾駮の牧山眼前也真野萱原も見ゆる」と記されてゐるが、奥ノ海は今の渡波だといふ。尾駮の牧山は今はただ牧山といふ。真野は牧山より遥か北東に当る。稲井村真野である。これは山の彼方であるから、石巻からは見えない。恐らくあの山の向ふがそれだといふ程のことであったらうと思ふ。渡波や牧山を見ようとすると、愛宕社の丘に立って東方を向かなければならない。その手前の眼下には石巻港が展開するのである。石巻は河港である。伊達政宗の時に鹿又から運河を開さくして北上川の水を石巻湾に導いて来て、そして今日の石巻港を造りあげたのである。北上川の流れは河口に於て中洲によって一時二分せられる。その中洲を仲瀬といふ。石巻市の中心街となってゐる。仲瀬に架する橋が内海橋である。その内海橋が今、眼下に見える。その橋の上手に住吉公園があるのである。その公園内に住吉の社があり、また運河を堀り石巻港を築きあげた川村孫兵衛重吉の記念碑がある。そして、その公園の前あたりが所謂古への袖のわたりであって、昔は渡船場であったのであらう。芭蕉らは日和山からの帰りにここに来った。例の曽良の日記には「袖のわたり鳥居前也」とある。但し、この袖のわたりの位置については疑ひがある。北上川運河を開いたのが徳川初期だとすると、それ以前には、ここには渡し場がなかったのであらうと思はれるからである。

宿の女中の話では、石巻市は金華山のために賑ふのだといふ。山形あたりから団参客が貸切バスで山を越して夜行してくるといふ。陸羽一円の金華山信仰は盛んなものやうだ。その金華山は、ここからは殆ど見えない。ただ年に何度か、よほど大気の澄んだ時に、牡鹿半島のかなたに、ちょっぴり淡くかすかに頭を見せることがあると

いふ。これも宿の女中の話である。もちろん、芭蕉らは金華山を見てゐなかったらう。従来の研究書には、みな、多分、網地島を見て金華山と思ったのであらうと書いてゐる。曽良の備忘録には「金花山仙台ヨリモ見ユル石ノ巻松島よりハ猶近ク見ユル高山也島也」とある。芭蕉も亦こんな説をとり入れたのかも知れない。奥の細道の石巻の条に「黄金花咲くとよみて奉りたる金花山海上に見渡し、数百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひてかまどの煙立てつづけたり」と書いた。万葉集に「こがね花咲く」と詠まれた山は、この金花山ではなかった。万葉学者の間では、それは同じ宮城県の遠田郡涌谷町元涌谷にある黄金山神社附近だと言はれてゐる。元涌谷の黄金山神社をそれだと考証したのは文化七年、伊勢白子の沖安海といふ国学者であった。芭蕉の頃には、まださういふ考証は行はれてゐない。芭蕉は何にでも俗説を信じた。真野の萱原も、芭蕉たちのいう稲井村真野ではなく、実は福島県相馬郡の真野であるといふことだ。昨夜寝床で読んだ扇畑忠雄氏の「みちのく文学風土記」によって、わたくしはさういふ正しい知識を得たのであった。芭蕉は歌枕の考証などには興味を持たなかったらしい。彼にとっては、名所は世の移りかわりを侘びしみ、自然の不易の姿にあこがれる機縁に過ぎなかったのである。

芭蕉の宿した新田町といふのは、どの辺であらうか。四兵衛といふ主の名はもとより一介の旅宿の主人の名に過ぎず、今はその家を尋ねるに、よすがもないであらうが、その町の位置ぐらゐは分るかも知れないのである。石巻市の公民館長佐藤露江氏は昨夜わたくしに宿を斡旋してくれた人である。今夜はもう遅いから明朝お目かかりますと同氏から電話があって、まだお目にかかってゐない。同氏にでも尋ねたら、新田町が今の石巻のどの辺に当るかが分るかも知れないと思ふ。わたくしの今立ってゐるのと反対側の、北上川の左岸に湊田町といふ町名がある。田町といふ名から連想して、このあたりに芭蕉が宿をとったのかと空想してみる。そこから川下の方へ行けば、魚市場のあたりへ出られるし、護良親王が後醍醐天皇を追慕して建てられたといふ吉野先帝御菩提碑のある多福院や護良親王の陵墓と言ひ伝へる一皇子宮なども程近いらしい。史上では鎌倉で薨ぜられた筈の護良親王が此処まで落ち延びられて父皇の崩御をここで聞かれたといふ悲しい口碑を残してゐる。このあたりは、右岸に比べて、よほど鄙びた通りであり、家並もゴミゴミしてゐて、侘しい感じである。繁華な町続きにこのやうな侘しい空気の漂ふ小路のあるのも旅先といふ感じを強める。奥の細道には、もちろん、護良親王の話も湊地区のことも記されてゐない。曽良の日記にもない。恐らく彼等はそれを知らなかったのであらう。けれども、大きな帆船が幾つも船がかりして賑やかな河口の近くに、このような侘しい町並が芭蕉の頃にもあったであらうし、芭蕉はそれに旅愁を覚えたでもあらう。奥の細道には、この地の繁華をたたへながら、而もその次に、「思ひかけずかかる所にも来れるかなと宿からんとすれど更に宿かす人なし」と書き続けた。その「思ひかけずかかる所に」といふ感傷の語気の中に、はるばる遠く来った彼の感懐がこめられてゐて、旅愁をいたはる彼の気持が滲み出てゐる。日和山からの眺めは、昼の趣きよりも薄暮の風趣の方がよけいに感傷をそそるであらう。芭蕉は、夕方にこの山に登ったのである。

芭蕉は何故日和山に登ったことを書かなかったのであらう。日和山は歌枕ではない。歌枕以外の地名には興をそそられないのが

芭蕉の常である。芭蕉はまた事実を伝へるのに主眼を置かず、気分を伝へるのに主眼をおいた。奥の細道には、この方針による多くの省筆がある。奥の細道に於ける石巻の記事は前に述べた如くである。金花山を海上に見渡し、数百の廻船入江に集ひ人家地を争ひてかまどの煙の立ちつづく景観は、どうしても高所より眺め渡したものでなければならぬ。石巻に於てこのやうな一望の景観を可能ならしめるものは、日和山の頂きしかない。芭蕉は日和山といふ地名は挙げなかったけれども、日和山での印象にもとづいて筆を執ってゐるのである。思ひかけずかかる所にも来れるかなといふ感懐もこの丘上でのものであらう。

松島から石巻へ出たのを道ふみたがえたのだと記してゐることが芭蕉の虚構であらうとは、今や定説化してゐる。しかし、もし海岸線を、今の仙石線の通ってゐるやうに、手樽、富山、大塚、東名を経て、野蒜に出て、野蒜から小野へ出たのであれば、「奥の細道の基礎的研究」に飯野哲二氏が言った如く、或は奥の細道の記事に近い事実があったかも知れない。随行日記には野蒜の地名が出て来ない。だが、その地名がないからと言って、この地を過ぎなかったとは言へない。曽良が日記には「馬次高城村小野石巻」としるされてゐる。これは馬次の宿場名をあげたのである。野蒜は馬次の宿場でなかったので、曽良は書かなかったのである。高城村は、今の高城町である。松島から東名へ出るまでの海岸は実に美しいのである。電車から眺めてゐても見飽きのしない景観である。芭蕉がこれに心を奪はれたとしても決して不思議ではない。仙石線の電車は、野蒜の手前あたりから平野に入り、小野の辺から漸く石巻街道と並んで走りはじめる。今、電車はほぼ芭蕉の通った道筋を走ってゐると見てよい。左手に美田が開けてゐる。昔の開墾田なのであらう。実に平垣で、ひろびろとしてゐる。矢本の駅前にはバスが停まってゐる。曽良の日記に、芭蕉が咽をかわかし戸毎に湯を乞うたが、呉れる家がなくて困ってゐるのを見かねて、通りすがりの五十七八の帯刀の人が、一丁ばかり後戻りして知人の家で湯茶を貰ってくれたと出てゐるが、それは多分このあたりのことであったのだらう。矢本新田といふ町でのことであった。その時、その親切が身にしみて嬉しく、名を問へば、根古村のコンノ源太左衛門と答へたといふ。根古村は小野村に属し、今では鳴瀬町に併合せられた。小野から北東の方にある部落である。芭蕉桃青翁御正伝記には、その村の人が、今野源兵衛。小野の城主の家老であったといふ。しかし、曽良の日記からは、家老といふほど身分のある人とは思はれない。ともかく、芭蕉はその今野某の紹介で石巻では新田町の四兵衛の家に一宿したのである。ところが、奥の細道では「宿からんとすれど更に宿かす人なし」と書いてゐる。明らかに芭蕉の曲筆である。これは石巻での旅愁を強調するためのものである。このことが芭蕉の曲筆だとすると、その前の文の「道ふみたがへ」たのも或は曲筆かも知れまい。曽良の備忘録には金花山とか尾ぶちの牧、真野の萱原等石巻在の名所のことが書き込んである。またその日記にも道にふみ迷った形跡は見えない。当時の地図にも石巻から一の関へ、一関街道が通じてゐるのであるから、芭蕉は最初から石巻に出て金花山等を見、一関街道を行かうと志したのであって、「道ふみたがへて」は、やはり旅愁を強調しようとする芭蕉の舞文であると見る方が正しいであらう。ただ、もし松島から東名の方へ道を辿ったとしたら、「人跡まれに」といふ個所だけは、或る程度事実だったかも知れない、いづれに

しろ、わたくしが昨日乗って来た電車は、小野のあたりからは、完全に芭蕉の歩いた道に沿って走ってゐたと言へる。

芭蕉は、「十二日平泉と心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞き伝へて、人跡まれに雉兎すうぜうの行きかふ道そこともわかず終に道ふみたがへて石の巻といふ湊に出づ」と心細い旅路のほどを叙し、続いて「黄金花咲くとよみて奉りたる金花山海上に見渡し」と石巻の景観を語るのである。「黄金花咲く」といふ一語は、華麗な気分を醸し出す言葉である。今まで人跡まれなるさびしい道を辿って来た芭蕉が、今、にわかに大都会に出たのである。さういふ旅の気持を、この一節は、巧みに現はしてゐる。道ふみたがへたのも、「黄金花さく」以下の一節の前奏として効果的であるし、続いて、景気のよい響きをもった黄金花さく金花山を見渡し、数百の廻船入江に集ふ賑ひを述べる。而も、それも所詮は旅愁をそそるだけのものであるから、「思ひかけずかかる所にも来れるかなと宿からんとすれども更に宿かす人なし」と旅のあはれに言葉を移すのである。「漸くまどしき小家に一夜をあかして、明くれば又知らぬ道まどひ行く」といふのは、更にそれに続く文章であるが、ここにも事実の相違がある。翌朝、出発の時は宿の主人ともう一人が柳津まで同行してゐる。二人は気仙沼へ行くのである。しかし、この文章も「心細き長沼に沿うて」といふ旅の心細かった実感を強く打出さうための序奏だとすれば、心にくい行文だと言わねばなるまい。

芭蕉の文章の妙を身にしめて味はひながら、宿に帰って朝食をとってゐると、裏向ひの旅館の前に多数の中学生が賑かに勢揃へをする様子が硝子窓越しに見える。山形の中学生で、これからパルプ工場を見て金華山へ向ふのだといふ。昨夕、わたくしの電車に松島から乗り込んで来た生徒達らしい。男の子も女の子も、みな紅玉りんごのやうに健康で紅い頬をしてゐる。

わたくしも、これから芭蕉の足跡を辿って、一関街道を平泉へ向はうと思ふ。仙台で飯野哲二氏に作ってもらった旅程によると、気仙沼行急行バスは八時五十五分の出発である。わたくしは、その急行バスを柳津で乗りすてて、そこから登米行バスに乗りかへようとするのである。完全に芭蕉の行ったコースである。

気仙沼行バスは、北上川の西岸の高い堤防上を北上しつづけるのである。比較的単調な道であるが、これが所謂一関街道であった。芭蕉がこの道を行ったことは、曽良の日記に鹿又を経て飯野川に出てゐることによって明らかである。鹿又は石巻湾に注ぐ北上川と追波湾に注ぐ追波川との分岐点である。すなはち、昔、慶長年間に伊達正宗は北上川の流れを柳津から飯野川まで西へ大きく迂回せしめた。鹿又はその迂回せしめた水を更に石巻への運河に分流せしめるところである。わたくしのバスは、鹿又のところで橋をわたった。そして、追波川の左岸を更に北上してゆく。飯野川の手前で、飯野川橋といふ大きな橋をわたった。芭蕉はここを渡し舟で渡ったらしい。橋をわたると間もなく飯野川の町並に入る。ところで、北上川は昔は、まっ直ぐに南下してゐた。それを前述の如く柳津で西へ迂回せしめられた。それは一に水利のためであった。西へ迂回したために元の川筋は、柳津から飯野川まで直線的な廃川が出来た。昭和十年にその廃川を改修して新北上川が出来た。芭蕉の頃はこの廃川が宛も細長い沼のやうな状態を呈してゐたらしい。芭蕉の所謂心細き長沼は、この廃川のことであるといふのが、「おくのほそ道の基礎的研究」の著者飯野哲二氏の説である。これは一つの発

見といはねばならぬ。飯野川から柳津を経て、日根牛までの間は、車は、新北上川の東岸を走るのである。飯野川を出て間もなく、根岸といふところあたりから、道は自動車がやっと通れるぐらゐの道幅になり両岸に山がぐっと押し迫るのである。車は森閑たる山裾すれすれに走る。人家などは勿論見えない。左手は漫水の大河である。岸には葦の類が生えてをり、時々は洲のやうなものも見える。今もなほ長沼時代の風趣が所々に漂ってゐる。かういふ山間が柳津まで続くのである。相当に長い。時間にしてバスで三十分は優にかかる。その間、山中に停留所が二つあるきりである。その一つの山田には貧しい家も二三見えるが、その次の虚空蔵尊のためのものはあたりに人家もない。出会ったものとては、自動自転車に乗った人一人だけであった。

荻原井泉水氏の「奥の細道を尋ねて」といふのを見ると、同氏は昭和三年七月に石巻から登米への旅をしてゐるが、その時は、小牛田行の汽車で佳景山に出て、そこからバスで和淵を過ぎって柳津に出てゐる。これは大体、慶長に作られた北上川に沿ってゐるコースで、従って、この飯野川を通らず、この新北上川の風光を見てゐない。もっとも、その頃はまだ新北上川が出来てゐなかったから、芭蕉の時代そのままの長沼で残ってゐたことと思ふが、それを見てゐない。和淵を経て柳津に出る道は所謂一関街道ではない。

登米へ行くには柳津で乗りかへなければならない。柳津から右へ東北にとって志津川を経て気仙沼への街道がある。登米へ行くには、柳津から左手よりに北上川を遡行するのである。芭蕉も石巻の連中と、この分岐点で袂を別ったのであった。「心細き長沼」を通る時は、同勢四人であったから、それにそのうちの二人までが土地の人たちであったから、芭蕉としては、心丈夫で、さほどさびしい旅とも思へないのであるが、しかし、その地勢のもたらす物さびしい僻土的風情は深く芭蕉を捉へて、あのやうな奥の細道の文になったのであらう。

柳津は一寸大きい町である。十分ほどの待合はせで、わたくしは登米行の小型バスに乗りかへた。再び北上川の東岸を北上するのである。柳津から登米まで七キロ、黄牛を過ぎて、日根牛に入り、左折して北上川に架する登米大橋を渡ると、登米である。登米は北上川沿いの旧城下町、さびしい町である。わたくしは、三日町といふ停留所で車を降りた。石巻から三十二キロ、所要時間約一時間半。

芭蕉は登米に一宿した。元禄二年五月十一日、太陽暦に換算すると、六月二十七日に当る。

芭蕉の旅宿については、曽良の日記には儀左衛門といふのが宿を貸さなかった。よって、検断庄左衛門方に頼んで泊めてもらったとしるされてゐる。それはどのあたりであらうか。仙台で飯野氏にきいたところでは、北上川の堤の下の民家の前に「芭蕉翁一宿の跡」といふ石碑が立ってゐる。そこが、検断蓮沼庄左衛門の跡だといふことであった。バスを降りて、同じ道を北上川の堤防まで引返し、教へられたままに、そのあたりの民家に一宿の碑を尋ねたが見当らない。大河は、先年の大洪水に崩れ、改修も半ば成功してゐるやうである。白昼の太陽が、川にも堤防の赤土にも白っぽく光ってゐる。

——大阪大学　教授・文博——